

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七九）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転(九)

謹賀新年

二〇〇〇年十二月の「還暦談義」での執筆から十五ヶ年の毎月皆勤で新しい年を迎えます。今後ともよろしく願います。

岸和田での中村一氏

中村孫平次一氏が岸和田城主として存在するのは天正十一（一五八三）年二月から天正十三年五月八日に近江水口へ移動するまでの足かけ三年、実質二年三ヶ月であった。織田信長の紀州攻めの時に従軍して紀州



紀伊の有田川から眺望する紀伊和泉の山脈

の雑賀・根来衆を抑える役割を担った天正五年からすると八年近くの縁を持った。三好氏から織田・豊臣氏に天下の覇権が動いた時代に紀州が特異な位置を占めた。熊野権現社・高野山金剛峰寺・根来寺・粉河寺・雑賀鷺森一向宗らの宗教勢力が領域支配をして守護の畠山氏の支配権を軽いものとして戦国大名は成立しなかった。三好長慶が興福寺・東大寺・春日社などの寺社勢力が絶対的な支配権を持った大和を松永久秀を駆使して支配下に置いた。次いで同様の紀州の支配が課題とされ、南和泉が前線となり岸和田が紀州勢の北上を抑止する拠点となった。永禄五（一五六二）年三月の久米田の合戦で三好実休が戦死したことに見られるように三好長慶も紀州支配はできず、信長からさらに秀

吉に継承される。それに本願寺勢との関係がからみ、顕如上人が信長と勅諭和睦して石山から雑賀鷺森へ移動し、さらに鷺森から秀吉の命で貝塚御坊へ移動する。その移動につれて前号（十二月一日）に顕如の祐筆であった『宇野主水日記』によって、記述したように、中村一氏が新しい「忙中閑」の任務が重要とされた。年末・年始の贈答・訪問して酒食を共にして共存の道を探っていた。岸和田が和戦両面での重要拠点であり中村一氏が城主としてその役割を担ったのである。

中村一氏の軍団編成

中村一氏が岸和田城主として三万石の大名に封じられた時に、秀吉は和泉の寺社領没収と国人衆の所領を検地してその「二分」を合わせて三万石とした。一氏の家臣団も紀州勢との合戦に対応するために編成・拡大される。

「岸和田合戦」では、紀州勢三万余の北上を岸和田城の中村一氏勢五〇〇〇と北和泉の国人衆三〇〇〇の八〇〇〇余で抑止し、それを大坂城からの蜂須賀・黒田勢の救援で撃退するとされる。

この天正十一（一五八三）年十一月から十二年の元旦から三月にかけての岸和田合戦の時期は、羽柴（豊臣）秀吉が西国の毛利氏との和平を図り、北陸の佐々氏を討伐しての西と北の不安をなくして最大の敵対勢力となった徳川家康と小牧・長久手の合戦を展開する時期であった。南からの不安が紀州勢に四国をほぼ制圧した長宗我部元親と連携して「遠交近攻・挟み討ち」されることであった。それを岸和田城の中村一氏、大坂城に信頼する参謀の蜂須賀正勝・黒田官兵衛を留守居として残し、正勝の嫡子の家政、官兵衛の嫡子の長政を救援部隊として派遣することで抑止できるとして、延期していた小牧・長久手の陣によりやく天正十二年三月二十一日に出陣したの

であった。

岸和田合戦の実情が『中村一氏記』に記録されている。「天正十二年正月元日に根来・雑賀方より岸和田へ朝込。同三日式部方より五ヶ所の敵を附城働きいろいろあり。式部内河毛惣左衛門・野一色頼母・早川助右衛門みなみな手柄つかまつり候。下和泉田中城にて眞鍋次郎・藪内匠・成合平左衛門・神谷平右衛門・遠藤喜内・松本三吉・田賀井左吉右衛門・湫又五郎かせぎ申候。松本・遠藤討死。眞鍋手負申候。」

「同年正月十六日に紀州一揆出張つかまつり、五ヶ所附城ノ勢馳加はり、八千余にて打って出でゲジゲジ山に本陣をすえ、佐野辺へ先手出し既に岸和田までも相働くべき態に見え申すにつき、岸和田城より出城に狐塚と申す所に砦これあるにより、その出城より室田孫之丞大將にて三十六人衆早速駆けつけ敵にとりつきかけひきいどみ応答おり申す内に、岸和田より中村式部少輔六千ばかりにてかきつき小木川にて対陣つかまつり、敵味方鉄砲足軽しばらく御座候所に、式部勢和泉侍松浦・寺田・眞鍋備いろ

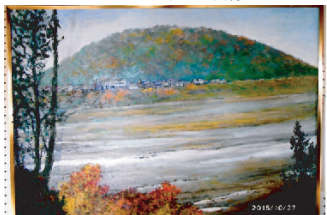
めき立ち惣がかりつかまつり、中道筋式部旗本にて成合平左衛門・神合平右衛門・林又太夫三人鎧合せ、上道筋和泉侍のそなえにて山神半太夫・寺田沙汰之助・田賀井左吉右衛門三人鎧合せ追ひくずし申候。式部打ち勝ち紀州一揆勢敗軍つかまつり候。式部少輔吟味に岸の和田三年掛合鎧と申は此の六人にて候ときめ申候。山神半太夫は松浦安太夫家来の者、寺田沙汰之助ハ寺田又右衛門内の者、田賀井左吉右衛門は眞鍋次郎家来の者、成合平左衛門は後に奥州へまいり木村伊予守の所にて三万石取り佐沼の城主にまかりなり申候。神谷平右衛門は戸田民部の所にて三千石取り申し候。山神半太夫は備前へまいり、伊木豊後の所にて六百石取申候。寺田沙汰之助は加藤清正にて千石取申候。右六人



岸和田合戦の由縁からの南海電鉄の蛸地蔵駅



蛸地蔵駅を装飾する岸和田合戦のステンドグラスの画像



中村一氏が近江水口の6万石に出世した岡山城を築城する岡山の画像

の鎧合わせ手は何れも根来にて御たいまいのはり赦免のもの共に候と承り及び候。右の通りたしかにうけたまわり及候へども、昔のことにて相違もこれ有るべく候間、左様に御心得成らるべく候」

このような記録から中村一氏が岸和田城主として紀州勢の抑止をするが、その軍団が一氏の直臣としての河毛惣左衛門・野一色頼母・矢野弥左衛門・早川助右衛門・眞鍋次郎・藪内匠・成合平左衛門・神合平右衛門・遠藤喜内・松本三吉・田賀井左吉右衛門・湫又五郎を中心とするものと、北和泉の国人衆の室田孫之丞を大將とする三十六人衆による軍団であることが推測される。

中村一氏の家臣団がまだ確定されておらず、混成軍団によって秀吉の小牧・長

久手への出陣の留守を岸和田城主と守っていたのである。その留守を守る合戦の最大の危機は、秀吉が出陣した三月二十一日の前後であった。秀吉の尾張への出陣の隙について雑賀・根来勢が長宗我部元親と談合し、雑賀・根来勢と湯河・玉置など総勢三万人が水陸両方から雑賀水軍が岸和田、泉大津へ攻め寄せ、陸路軍は和泉各所に放火し、泉佐野辺りまで進軍し、秀吉の出陣の三月二十一日の翌日には水軍一三〇艘と陸路軍が堺に攻め入り、堺の町が一時は紀州一揆に占領され、堺政所が追い出され、紀州勢はさらに住吉・天王寺まで進出したと言う。これに対して蜂須賀家政・生駒親正・黒田長政らが大阪城から打って出て防いだ。

土橋平丞兄弟を大將とする雑賀衆五〇〇と根来衆三〇〇の軍勢が岸和田城を攻めたが、これには岸和田城を守る中村一氏と和泉の国人衆五〇〇が城から出て戦った。この合戦で岸和田の中村一氏勢が劣勢からの逆転の勝利をした。堺に向かっていた雑賀・根来の兵は慌てて岸和田に引き返した。

中村一氏勢の勝利を宇野主水は「岸和田へ取り集めたる首七百六十九と云々、此外所々に討捨あり」と記し、宣教師のルイス・フロイスは「孫一（中村一氏）は全軍を挙げて攻撃に出て敵に非常な損害を与え、短時間に四千余名ほどの敵兵を殺戮した。五畿内においては、自らの討ち取った首級を指揮官に指し出す習わしであったが、各兵士はすでに疲れていたで耳だけを切り取って行った」とその『日本史』に記録している。

このような推移の中で、堺から岸和田の周辺にそれまでの三好氏の由縁で残存していた「三好の残党」が文武に優れた才能を持った横田内膳を中心にして、旧主で信長、秀吉に重用された三好康長の仲介で岸和田城主として苦戦する中村一氏を救援して臣従したものと推測すれば、中村一氏とその妹を横田内膳の正室としてその後に家老として厚遇することも矛盾することなく、「納得」とされるであろう。中村一氏が六万石の近江水口城主に、秀吉が小牧・長久手合戦で織田信雄を揺さぶり、徳川家康を

有無なしに屈服させた後に、天正十三（一五八五）年三月から紀州の根来衆の本拠の根来寺を焼き討ち、雑賀衆を太田城水攻めで全滅させ、高野山金剛峰寺を降伏させた、その直後の五月八日に「出世」して出る。

中村一氏の最大の岸和田城主としての功績は秀吉の留守中の紀州勢を抑止したことである。その紀州勢に阿波の故城を奪われた仇敵の長宗我部元親勢が加わったことで、横田内膳らが「白法師の地蔵尊を守護する三階菱の旗幟を押し立てた援軍」となったとして、これまた矛盾がない。

中村一氏、近江水口へ

「五月八日中村孫平次岸和田城より江州甲賀へ罷り越さるなり。そのまま甲賀を領地として居住の用意なり。明日に音信として縮二十端、道福一を刑部卿を御使として遣われ候御書あり」と「宇野主水日記」に記録される。そんな近江水口への移動であったのがあるから、その時に横田村詮が同族の臣下を引率して中村一氏勢の中に居たであろうことは、当然とされるであろう。